

朝鮮漂着民との関連で作成された朝鮮図

河村克典

一、はじめに

山口県文書館に手書きの朝鮮図が所蔵されている(第1図¹)。題簽に「朝鮮八道総図」とあり、図面を広げた大きさは、縦(南北)二七五、横(東西)二〇五センチメートルである。本図は管見では、日本国内に現存する朝鮮図の中では、図面の大きさ、記載の情報量ともに最大の部類に含まれる。

韓国、日本には李氏朝鮮時代(一三九二〜一九一〇年)に作成された朝鮮図(朝鮮全図、朝鮮総図)が少なからず現存している。李燦氏はこれらの図を朝鮮半島の輪郭から前期朝鮮図と後期朝鮮図に区分した²。本図に描かれている朝鮮半島の部分は、この分類に従うと半島の輪郭が大きく歪んでいるので前期朝鮮図に含まれる。これまでの前期朝鮮図に関する研究は、系統的な分析を試みた事例はなく、「混一疆理歴代国都地区」における朝鮮半島の部分³、「三國通覧図説」付図「朝鮮国全図」⁴、「朝鮮国図」(内閣文庫、国立公文書館蔵)⁵、「木版朝鮮国図」(東京韓国研究院蔵)⁶、「新增東国輿地勝覧」収載「朝鮮総図」⁷、「朝鮮八道之図」(山口県文書館蔵)⁸、「朝鮮國窓圖」(岩国徴古館蔵)⁹などを個別に紹介したものに限られる。

本図は本来の朝鮮図とは違つて、朝鮮半島に加え日本の日本海沿岸までをも含めて描かれているのが特徴である。

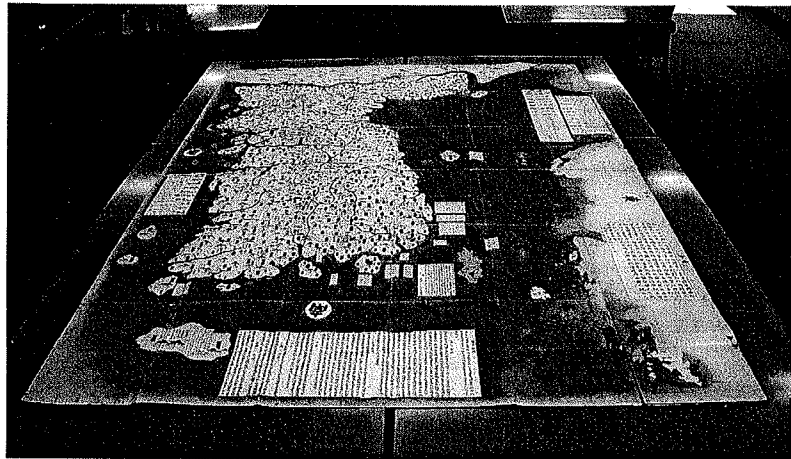
本稿では本図の作成目的、作成者、作成年などについて検討してみた。
い。

二、本図の作成経緯

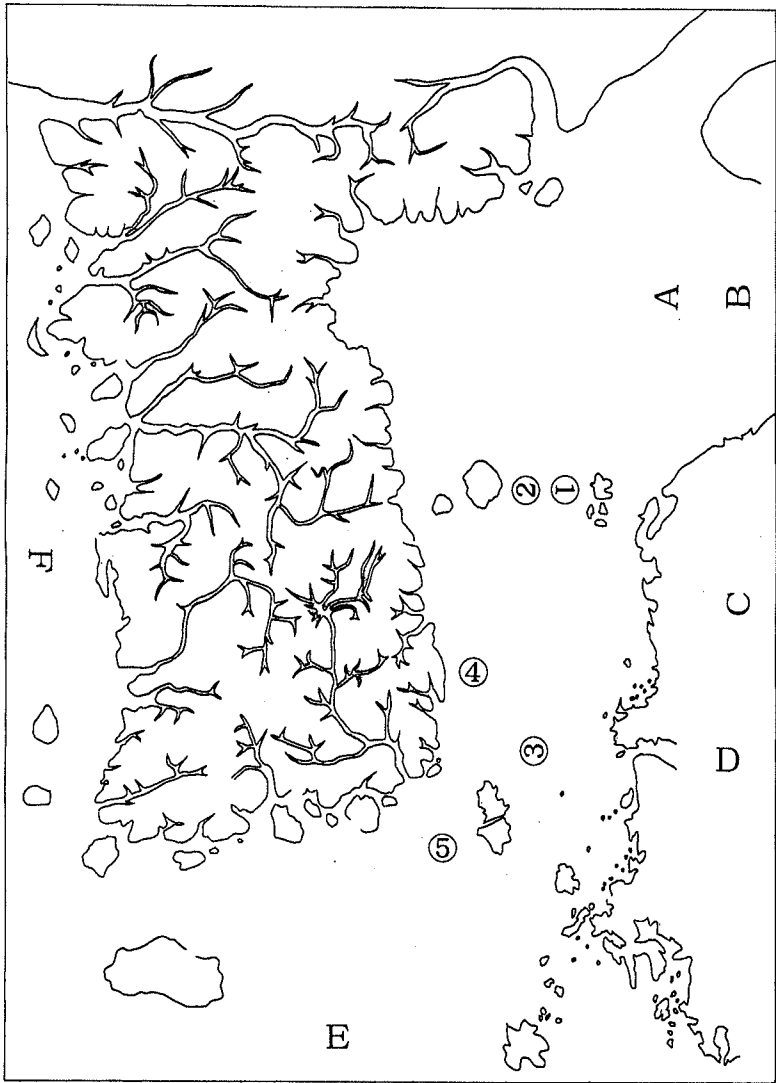
本図には、作成目的、作成者、作成年などの経緯を示す記事が見られる。一般に前期朝鮮図は図中に州・府・県・郡などの行政地名を記し、地図の余白にそれら行政区数の合計を掲載したものが多く、本図のように作成経緯を詳細に記す例は少ない。本図には行政区数を掲載する他に、次のような記事がみられる。

闕此図者朝鮮八道総図也所図之一書者拋東國輿地勝覽而不差毫釐所写也嘗松原正軒對馬為訳官久在彼土而日夜間交韓人質之府州郡県令堡地理行程名山名嶺河海遠島抵西鴨綠遼東堺北豆満女真野人境尽考尋之以圖中書而議論之及云此図最可也嘗正軒当国来受 国恩茲山内廣通当執政而清水親全為浜崎之宰時命正軒子正英而於船倉之館使關正之写矣以加耆岐對馬五島九州西北海辺国而韓人飄泊之為弁用者也時

寛保二 壬戌 秋八月也



第1図 山口県文書館蔵「朝鮮八道総図」



第2図 山口県文書館蔵「朝鮮八道総図」のトレース図
注) 図中のA~F、①~⑤は、本文、資料中の記号に対応する。

この記事(以下、「記事D」と略す。第2図のDの位置に記載。)によると、本図は「東國輿地勝覽」や松原正軒が朝鮮で収集した情報をもとに作成されたことが分かる。松原正軒は対馬藩の通詞(訳官)で朝鮮にしばらく滞在し、その間に朝鮮の地理、歴史について詳細な調査を行い、さらには鴨緑江、豆満江の北方地域も考究したという。その後、松原正軒は萩へ迎えられ、それらの情報をもたらした。本図はこの正軒の情報にもとづいて、寛保二年(一七四二)に浜崎代官の清水親全¹¹⁾の指示により、正軒の息子正英が作成したものである。

この松原正軒に関しては、木部氏による研究がある¹²⁾。木部氏によると、松原正軒は対馬藩の通詞で、釜山の倭館において数年間の在番を経験した後、享保八年(一七二三)に萩藩へ通詞として迎えられ、朝鮮漂着民への対応に当たっており、このことは前述の「記事D」の内容と一致している。

三、朝鮮人の須佐漂着

本図が作成された前年の寛保元年一月に阿武郡須佐へ朝鮮人一〇名が漂着したという記録がある¹³⁾。この漂着に際して、松原正軒の息子直右衛門(正英¹⁴⁾)が通詞として漂着地に出張し朝鮮人に対して事情聴取を行っている。本図はそれとの関連で作成されたものと考えられる。

近世において日本に漂着した朝鮮人はかなりの数がみられ、長門国では一六四四年から一八七〇年の間に、一七五件、総勢一五二六名の朝鮮人の漂着が確認されている¹⁵⁾。同国への朝鮮漂着民はいったん萩城下の御船倉に收容され、その後、長崎、対馬を経て釜山へ送還されていた。朝鮮からわが国への漂着民は手厚くもてなされたが、言葉の疎通が問題でしばしばトラブルの発生もあったようである。この寛保元年の漂着民に対して、松原直右衛門は漂着民の人

数・出身地、出航した港、遭難の状況、漂着した場所・日時について詳しく事情聴取を行っている¹⁶⁾。

『朝鮮船対馬船漂着沙汰事』の「直右衛門調出候朝鮮人答之覚」によると、この時の様子が次のように記録されている。

朝鮮八道之内咸鏡之一道当五月白露下七月霜降候付五穀悉虫付枯損候依之北道之諸民及飢候付京都より七道え被相触穀物運漕相成候故出府密陽より為役船迎日県え罷越穀物を積咸鏡道え参答にて固城之者二人巨濟之者七人密陽より送り之役人邑吏一人以上十人固城巨濟両邑之民商魚船一艘二乗組^{密陽二は海船無之}十月四日三浪江を出船候逆風ニ相成順風を待所々滞船去月廿三日迎日県東面陽江を渡候処俄北風吹来洋中ニ漂間廿七日日本之地え漂流同夜四時分山嶋え被吹付即刻及破船(以下、省略)

この記録にみられるように朝鮮漂着民は漂着までの経緯を朝鮮半島北東部の咸鏡道から中央部の京都(漢城)、南東部の慶尚道の固城・巨濟・密陽、迎日、そして日本側の須佐の山嶋(現在の山口県須佐町)までの場所を示して説明している。このため、朝鮮半島だけでなく対馬海峡をへだてて日本の北西部沿岸までを描いた地図が必要となり、本図が作成されたものと推定される。また、本図は朝鮮各地における地理・歴史の情報が多く包含されており、本図を通して朝鮮漂着民との円滑な意志の交流が意図されたのかもしれない。

四、本図の内容

本図は中心部に朝鮮、そして右端に日本の蝦夷、途中の東北、北陸は記載がなく、右端の下部に中国、九州地方の日本海側が描かれている。朝鮮図の多くは朝鮮半島を図示範囲としていて日本の沿岸までも含めるのは例を見ないが、

本図は前述のように朝鮮漂流民の出発地と漂着場所との関係からこのように描かれたものと推定される。

本図は、①地図の基本的要素である方位、山地、河川、地名、道などが描かれ、その上に②各地域の歴史などを説明した記事が書かれている。また、③本図の余白には、八道の凡例「朝鮮色分式」（第3図。第2図のAの位置に記載）、行政区の数（資料の記事B。第2図のBの位置に記載。以下、同じ）、日本と朝鮮の距離の単位「朝鮮里程」（C）、朝鮮歴代王朝（E）、朝鮮の歴史（F）などに関する記事がみられる。本図の記載内容の整理では、この三つのうち①②を中心に行うことにする。

（1）朝鮮・日本の描写

朝鮮と日本の描き方には基本的な違いがみられ、朝鮮半島は記載の情報量が多いのに対して日本は簡略的である。また、日本に比べ朝鮮の色彩が鮮やかで、朝鮮を中心とした地図であることが分かる。以下、朝鮮と日本を分けて記載内容を整理してみる。

①朝鮮の描写

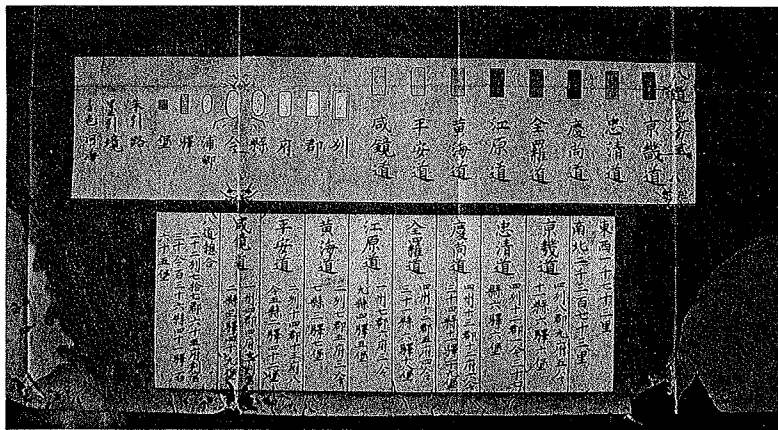
本図の朝鮮半島および周辺の島は、基本的には肌色で着色され、一部の島は茶や緑で着色されている。朝鮮の部分は河川、山地が描かれ、それぞれを青と緑で着色している。朝鮮半島にみられる河川は川幅を大きく描いているが、これは李氏朝鮮時代に作成された図の特徴である。川の中には「漢江舟渡し」などの記事がみられる。山は一つ一つ独立した描写である。李氏朝鮮時代の朝鮮の地図は山を連続的に描く方法が一般的であるが、本図はそのような方法は取られていない。

本図には李氏朝鮮時代の地方制度にもとづく道の区画、州・府・郡・県の地名、兵営・水営などの軍事基地、堡、

駅、道筋などが記されている。李氏朝鮮時代は全国は八道に分かれ、その下に州・府・郡・県がおかれた。道には觀察使、州・府・郡・県には守令が地方官として中央から派遣された。その他に軍事組織として、中央に五衛、地方には兵衛（陸軍）と水営（海軍）、そして営の下に鎮がおかれた¹⁸。地図の余白にこれらの凡例の「朝鮮色分式」が記載されている。州・府・郡・県は楕円、小判型などの異なる枠で表現し、兵営、水営は赤で着色された四角の枠で示されている。州・府・郡・県はさらに八道の区別ができるように、これらを囲む枠が京畿道（濃茶）、忠清道（橙）、慶尚道（緑）、全羅道（朱）、江原道（茶）、黄海道（濃橙）、平安道（桃）、咸鏡道（黄土）で着色され、その八道の境には黒筋が引かれている。また、浦および郷は小判型、駅は短冊状で示され、その中に名称が記されている¹⁹。駅は朱筋によって示された道でつながっている。

②日本の描写

日本側は蝦夷と中国から九州地方にかけての日本海沿岸が描かれている。九州では筑前から薩摩にかけての海岸線は実際とは異なり、北から南に向けて直線的に描かれているなどが特徴的であり、海岸線の出入りや島については詳しく描写されている。図示されている但馬、因幡、伯



第3図 「朝鮮八道総図」部分（朝鮮色分式）

耆、出雲、石見、長門、豊前、筑前、肥前、筑後、薩摩、大隅、隠岐、対馬、壹岐は国ごとに色分けされ、肥前国の中ではさらに平戸、五島が別色で区別されている。地名は海岸を主に町、村、港、島について記されている。また、港を結ぶ航路は朱筋で引かれて、その海上の距離が記されている。たとえば、赤間関から萩城下までは「萩エ廿九リ」、名護屋から壹岐のタキまでは「十八リ」、壹岐の勝本から対馬の府中までは「四十八里」、府中から鰐崎までは「五十里」、鰐崎から釜山までは「四十八里ト云トモ甚ダ近シ」などと記されている。

(2) 図中の記事

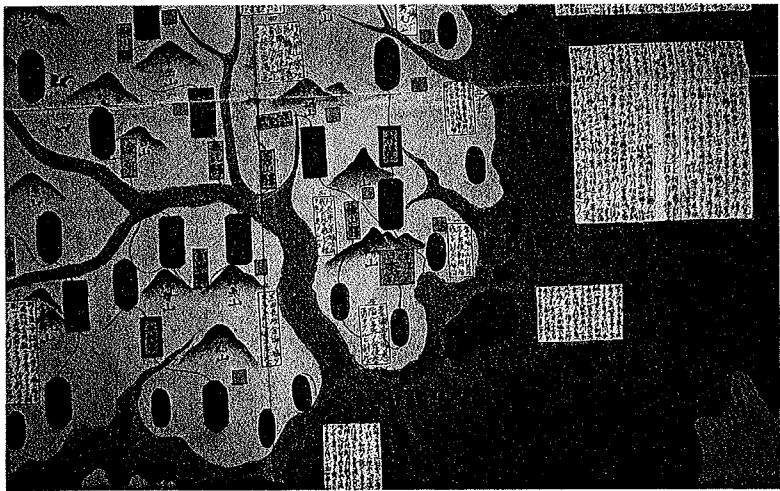
図中に各種の記事がみられる。朝鮮の各地には地理的、歴史的事項、文禄・慶長の役で秀吉軍が侵略した際の各地での行動について詳しく書かれている。また、倭館、竹島に関する注記もみられる。ここでは記事の内容ごとに検討してみたい。

① 朝鮮各地の地理・歴史

朝鮮の地理的、歴史的に重要な場所には、「記事D」に示されているように『新增東国輿地勝覧』²⁰を引用した記載がみられる。たとえば、開城府においては「新羅松岳郡本高句麗扶穰岬開城郡從鐵原徒干此」、漢城府には「本朝鮮馬韓府今楊州本高句麗北韓山郡百濟取之移都近肖古王自南韓山城徒都至蓋鹵王高句麗王來開漢城走出遇害子文周王移都松州」とある。これらの内容は『新增東国輿地勝覧』の開城府の項には、「新羅松岳郡本高句麗扶穰岬開城郡本高句麗冬比忽（後略）」、漢城府の項には「本高句麗北韓山郡百濟温祚王取之築城近肖古王自南韓山徒都焉歷一百五年至蓋鹵王高句麗長寿王來開都城蓋鹵出走遇害子文周王移都（後略）」とある。

② 文禄・慶長の役に関する記事

図中に秀吉軍の侵略の様子を示す記事が多くみられる。秀吉は日本国内の統一後、文禄、慶長の二回に渡って朝鮮へ出兵した。この記事は秀吉軍侵略の全体を説明したもの（資料の記事⑤）。第2図の⑤の位置に記載。と、各地域での行動を示したものとからなっている。前者の記事は、秀吉軍が上陸した釜山の沖の位置に書かれている。また各地の行動に関する記事は秀吉軍の侵略の順に、「一」から「七十九 終」まで番号が付けられている。たとえば、記事の「一」「五」「六」「三十」「七十七」には次のような内容がみられる。「一」釜山ノ城小西行長攻落ス僉使鄭撥防戦シテ討死ス城陥、五「黒田長政金海ノ城ヲ攻落ス府使逃奔走ス」、六「加藤清正慶州ニ押ヨセ民屋ヲ放火シテ攻落ス城中悉ク敗走ス」、三十「慶尚道右水使元均倭軍ノ勇ニ怖レ一戦ニモ及ハス番船数十艘加藤ニ乗取ラレ終ニ四艘ニ取乗テ昆陽ニ至リ敗走ス」、七十七「東路ノ大将麻貴蔚山ノ城ニ押寄攻戦フ時ニ立花宗茂蔚山後詰トシテ馳向ヒ城兵是ニ力ヲ得テ防キ戦明兵打少負テ引退ク」など、小西行長、黒田長政、加藤清正、立花宗茂らの戦いが記されている。



第4図 「朝鮮八道総図」部分（釜山付近）

③釜山の倭館

釜山の近くに倭館が赤の方格で図示され、格中には「草梁 日本館」と記されている(第4図)。そしてそのそばには倭館に関する記事がみられる。倭館は朝鮮における日本人の居留地区で、使者の応接所、宿泊所、あるいは貿易所などが設営された²¹⁾。倭館の設置は一五世紀初頭から始まり、まず東萊釜山浦、蔚山塩浦、熊川薺浦の三箇所に置かれ、その後、廃止、移転などを経て、延宝六年(一六七八)から明治六(一八七三)までは草梁に置かれた。図中の釜山の近くに記載された倭館(日本館)に関する記事(第2図の④の位置に記載)は次のとおりである。

一釜山之浜際ニ城有之秀吉公御陣之節此所之一方ハ沼一方ハ田一方ハ海也城蕃京都より三年代リニ相詰申候武官ニテ僉使ト云釜山之城之上ニ又城有是茂日本城也今ハ明キ城ニて城内ニ古キ墓多く有朝鮮陣之節日本人を此所ニ葬由シ

一日本館より沓里半程先ニ石碑有此所より先へ常ニ日本館之者往事を不免也

一東萊之城代ハ父友ニて府使ト云是も三年代リ也

一日本館北ノ門より一町程先ニ饗応場有之此所より先ニ又拜所ト云所有此所ニ樓閣有リ殿ノ字ノ金額ヲ打ツ是ヲ拜スル也饗応場之額ニハ遠業堂ト有リ遠ク来ルヲ安ンスルノ心ナリ

一釜山之町は宿也長サ一里程有リ家統なり日本ト違ひ悠々ト作りタルは也

一日本館屋敷之内ニ日本寺有リ東向寺ト云対州より出家式人来居日本人ノ葬祭ヲ仕ル也

一往古ハ日本館蔚山熊川釜山三ヶ所ニ有之由朝鮮陣已来ハ釜山一ヶ所ニ相成候事

このように、ここでは倭館の地理的位置、館内の様子、釜山の町の様子、倭館の歴史についての説明が施されている。²²⁾

④竹島に関する記事

本図には隠岐と鬱陵島の間には竹島に関する記事がみられる。まず、隠岐の描かれているところに「此湊ヨリ天氣定竹島乗ル、凡百五十里余有之ト云」(第2図の①の位置に記載)と記され、隠岐から竹島までは百五十里であることが示されている。また、鬱陵島の東側には次のような記事(第2図の②の位置に記載)がみられる。

元禄六年伯耆国磯竹源左衛門ト云者竹島ヲ見申之由是ヨリ伯耆出雲因幡之獵人參獵仕候所ニ其節朝鮮人も参双方論シ依之江戸御注進相成候所ニ対馬より朝鮮人も段々被取遣り有之終ニ朝鮮之鬱陵島ニ相決シ候事

ここでは竹島のこと記されているが、本図の隠岐と鬱陵島の間には現在の竹島は描かれていない。²³⁾

五、おわりに

本図は萩藩に仕えた松原正英が朝鮮漂着民の取り調べを目的として、寛保二年(一七四二)に作成したものである。作者の正英はかつて対州の朝鮮通詞であった松原正軒の息子であって、父正軒が朝鮮で収集した情報や『東国輿地勝覽』をもとにしてこの地図を作成している。正英は朝鮮漂着民の事情聴取にあたって、朝鮮半島のみを描いた朝鮮図、日本図などの個別地図では十分に対応できず、朝鮮図に漂着民の漂着する日本の西側沿岸を加えた独自の地図を作成したものと考えられる。本図の原拠となる朝鮮図は李氏朝鮮前期朝鮮図に属し、その朝鮮図は父正軒が朝鮮から持ち帰ったものと考えられる。

本稿の作成にあたっては、東亜大学の川村博忠先生にご指導をいただきました。ここに記して感謝いたします。な

お、本稿は平成六年度地理科学学会・日本地理教育学会・広島史学研究会合同学術研究発表大会で発表した内容の一部を加筆・修正したものである。

〔注〕

- (1) 毛利家文庫、五八絵図、二三、二の一。これと同種の図がある。名称は「朝鮮八道全図」(請求番号は前者と同じで二の二)、大きさは縦(南北)二六六、横(東西)一九二センチメートルである。題簽に前者は「朝鮮八道総図」が、後者は「朝鮮八道全国松原正軒著」が記載されている。両図は縦横の大きさや記載内容はほぼ同じであるが、後者は前者に比べて描写が粗雑である。
- (2) 韓国図書館研究会(一九七七)：『韓国古地図』(韓国語)。盧禎植(一九七七)：『韓国古地図資料及びその研究成果と新しい方向模索に関する研究』(韓国語)、大邱教育大学論文集、一三。河村克典(一九九四)：『平成六年度歴史地理学会研究発表大会発表要旨』。
- (3) 李燦(一九九二)：『韓国の古地図』(韓国語)、汎友社。朝鮮半島が現在の地図と近似している鄭尚驥(二六七八)一七五二

- (9) 河村克典(一九九〇)：『山口県文書館蔵「朝鮮八道之図」について、エリア山口、一九、山口地理学会。
- (10) 河村克典(一九九二)：『岩国徴古館所蔵「朝鮮國愍圖」について、山口県地方史研究、六七。
- (11) 浜崎代官の在任期間は、元文三年(一七三六)から延享三年(一七四六)である。山口県文書館(一九六〇)：『防長風土注進案』第二巻、研究要覧、山口県立山口図書館、二六四～二六七頁。
- (12) 木部和昭(一九九三)：『朝鮮漂流民の救助・送還にみる日朝両国の接触―朝鮮通詞の問題と漂流民の騒擾事件を中心として―、史境、二六。
- (13) 毛利家文庫、7諸省、18の7、『朝鮮船対州船漂着沙汰事』。
- (14) 本図に掲載の記事Dの中に「松原正軒子正英」とあり、また、木部氏によると正軒の息子は直右衛門である(前掲12)ことから直右衛門は正英であると考えられる。
- (15) 岸浩(一九八五)：『長門北浦に漂着した朝鮮船の記録、山口県朝鮮漂着民との関連で作成された朝鮮図(河村)

- 年)作成の「東国地図」、金正浩(二八〇四)一八六六年)の「青邱図」(二八四三年)、「大東輿地図」(二八六一年)を後期朝鮮図とし、これよりも以前の半島が歪んでいる朝鮮図を前期とした。
- (4) 弘中芳男(一九八九)：『島原市本光寺蔵混一疆理歴代国都地圖』一・二、二七―三・四。

- (5) 海野一隆(一九七五)：『日本古地図大成世界図編』解説、織田武雄・室賀信夫・海野一隆編集、講談社。河村克典(一九九七)：『林子平「朝鮮国全図」の内容とその系統本、エリア山口、二六、山口地理学会。
- (6) 青山定雄(一九三九)：『李朝に於ける二三の朝鮮地図について、東方学報、九。長正統(一九八二)：『内閣文庫所蔵「朝鮮国図」およびその諸本についての研究、史淵、二〇―二。
- (7) 西川孝雄(一九八二)：『李朝時代の「木版八道総図」、韓、一〇一、東京韓国研究院。

- (8) 李燦(一九七九)：『東覽図の特性と地図発達史からの位置』韓

地方史研究、五三。岸浩(一九八六)：『長門沿岸に漂着した朝鮮人の送還を巡る諸問題の検討、朝鮮学報、一一九・一二〇。前掲(12)。

- (16) 前掲(13)。

- (17) 海野一隆(一九八三)：『韓国地図学の特徴』(韓国語)、韓国科学史学会誌、五一、一〇一―一〇五頁。
- (18) 朝鮮史研究会編(一九八八)：『朝鮮の歴史』、三省堂、一一五頁。

- (19) 浦および郷は京畿道(朱)、忠清道(桃)、慶尚道(茶)、全羅道(桃)、江原道(桃)、黄海道(黄)、平安道(緑)、咸鏡道(茶)のように道ごとに色分けされている。また駅は短冊状の中に橙か桃で着色され、八道の区別はされていない。

- (20) 『全国地理志』(韓国学文献研究所、亜細亜文化社、ソウル。一九八三年)に収録。

- (21) 田代和生(一九八七)：『近世日朝通交貿易史の研究』、一六七―二〇二頁。

- (22) 倭館(日本館)などの記述は前述の木部氏が紹介した『御国廻

朝鮮漂着民との関連で作成された朝鮮図(河村)

一四

行程記』の内容と一致がみられる。『御国廻行程記』(一)萩、阿

武郡下田麻万村、毛利家文庫、三〇地誌、五七。

(23) 田村清三郎(一九九六)、『島根県竹島の新研究』復刻版。川

上健三(一九六六)、『竹島の歴史地理学的研究』、古今書院。

〔資料〕(記事③④BCDEFは、第2図に対応する)

台命

松原正英書

〔記事B〕

東西一千七十三里

南北二千三百七十三里

京畿道 四州八郡九府五令十一縣六驛六堡 忠清道 四州十二郡

一令三十七縣六驛六堡 慶尙道 四州十三郡十二府六令三十四縣

十一驛二十九堡

全羅道 四州十二郡五府四令三十一縣六驛十八堡

江原道 一州七郡六府三令九縣四驛五堡

黃海道 二州七郡五府三令七縣三驛七堡

平安道 二州十四郡十三府八令五縣二驛四十二堡

咸鏡道 一州四郡四府十一判官二縣三驛四十九堡

八道總合 二十二州七拾七郡六十五府判官三十令百三十六縣四十

〔記事③〕
鰐浦佐須奈浦より釜山浦之船着迄四拾八里ト云トモ二十里余有之
サスナ浦ハ三月より八月迄之間出津場ニ定メ鰐浦ハ九月より三月
朔日迄之出津場也サスナ浦ハ冬ニナリ乗前殊之外惡敷故所ニ閑
所有之ナリ

〔記事⑤〕

曩昔豊臣太閤秀吉公欲征伐三韓天正二十壬辰三月其身に肥前名護
屋以家臣小西撰津守行長加藤主計頭清正為先鋒朝鮮而輝元公隆景
公秀元公中公納言秀秋卿浮田秀家黒田長政大友義統福嶋政則嶋津宗
義智鍋嶋直茂蜂須賀家政立花宗茂筑紫上野介船手勢九鬼喜隆藤宗
高虎協坂安治加藤嘉明此外諸將水陸之軍勢惣而十四萬六千余騎名

一驛百六十五堡

〔記事C〕

朝鮮程

千足ヲ一里トス日本三拾六町

一里ハ六里四百八十足ナリ

漸六里半程也

朝鮮ノ一里ハ日本六町余也

日本ノ十里ハ六十四里也

日本六十間ヲ一里トス百八十足也

〔記事D〕(本文中に掲載)

〔記事E〕

檀君朝鮮

東方初無君長有神人降于檀木下国人立為檀君国号朝鮮是唐堯戊辰
歲也初都平壤後徙都白岳至商武丁八年乙未入阿斯達山為神云

箕子朝鮮

殷太師箕子紂諸父也紂無道也此干諫而死微子去之箕子即被髮佯狂
為奴管曰商其淪喪我岡為臣僕周武王伐紂訪道于箕子箕子為陳洪範

朝鮮漂着民との関連で作成された朝鮮図(河村)

護屋發船経壹岐対馬而著釜山浦從壬辰四月到慶長三年戊戌十月総
七箇年之間及防戦無萬一失矣於是探於明朝和朝之書籍拔萃而以於
其所略記其事迹矣時寛保二壬戌仲秋下流

奉

九疇武王封于朝鮮都平壤教其民以禮儀田蚕織作為民設禁八條相殺
以當時償殺相傷以穀償相盜者男没入為其家奴女為婢欲自贖者人五
十萬雖免為民俗猶羞之嫁媾無所旧是以其民不相盜無門戶閉婦人貞
信不□□其田野都邑飲食以□豆有仁賢之化其後孫朝鮮俟見周裏而
燕称王將東略地亦自称王欲興兵伐燕以尊周大夫禮諫之而止禮西說
燕燕亦止不攻後子孫稍驕虐燕乃遣將攻其西所地二千余里至滿潘汗
為界朝鮮遂弱及秦□天下築長城抵遼東四十代孫否立畏秦遂眼屬於
秦否死箕子準立二十四年而陳項起天下乱燕齊民愁苦稍々亡婦準及
廬紹為燕王準燕以□水為界及紹友人□奴燕人衛滿亡命聚□千余人
□結蠻夷眠而東渡水水永居西界為藩□準信之拜為博士賜以圭封之
百里令守西鄙滿誘亡□稍衆乃遣人□告準漢兵十道至欲人宿衛遂襲
準準戰不□浮海南奔

衛滿朝鮮

衛滿既遂箕準掘王儉城會孝惠高后時天下初定遼東太守約滿為外臣
保塞外諸国無□使冠邊諸国欲入朝勿禁以故滿得以兵威財物侵降其
旁小邑真蕃臨屯皆來眼属方教百千里傅子至孫右渠所誘漢亡人□多
又未嘗入觀辰国欲入朝天使又□闕不通武帝使涉何□論右渠終不肯

奉詔襲殺何元封三年帝遣樓船將軍楊僕從齊浮渤海左將軍荀□出遼東東討之右渠發兵拒之兩將困城戰不利朝鮮大臣陰使人□降樓船以間之將軍急襲船欲就約不戰左將軍樓船反以故不相能帝以兵久不決遣齊南太守公孫遂往征之得以使宣從事遂至左將軍告遂執樓船□其軍急擊之朝鮮相路人相韓陰尼豁相參將軍王□相與謀殺右渠降漢遂定朝鮮為四郡封參為四郡封參為□清侯陰為荻□侯為平州侯路人子最為恩陽侯

四郡

漢武帝元年討右有遂定朝鮮故地為樂浪臨屯玄□真□四郡樂浪治朝鮮縣□以右渠所都為治所也臨屯治東□縣玄□治□沮城後為夷□所侵徒郡□麗西北真□治□縣郡初取□於遼東吏見民無閉藏及買人住者夜則為盜俗稍益薄肥瘠多至六十餘條仁賢之化變矣

二府

漢□帝始元五年以朝鮮旧地平那玄□等郡為平州都督府臨樂為東府都監府

三韓 馬韓

箕準既為衛滿所攻大集率其左右宮走入海居韓地金馬郡自号韓王其

民土著種植知蚕桑作綿衣各有長師大者自各為臣知其知其次為邑借散有山海間無城郭有凡五十余国居处作草屋土室其戸向上俗不重金銀錦貴□椌珠用以飾髮垂耳其男子衣□□草□勇□呼力作用弓楯□楯

辰韓 弁韓

辰韓在馬韓之東自言秦之亡人避役人韓々割東界以興之立城柵言語有類秦人或謂秦韓常用馬韓人作王雖世々相承而不德自立明其流移之人常制馬韓地□穀俗饒蚕桑善作□布乘駕牛馬嫁娶礼俗男女有別行者相違達皆住讓路又有弁韓不知其始祖屬於辰韓辰弁二国各統十二国又有小別邑

〔記事F〕

檀君 初朝鮮唐堯戊辰年建国享年千四十八年
箕子 二朝鮮四十壹代享年九百八十八年
衛滿 三朝鮮三代享年八十八年
辰韓 新羅 五十六代享年九百九十二年
弁韓 高句麗 二十八代享年七百五十年
馬韓 百濟 三十一代享年六百七十八年

後高麗 弓裔一代十八年

後百濟 甄萱一代四十五年

高麗 三十四代享年四百七十五年

朝鮮 明太祖皇帝洪武三十年高麗改朝鮮